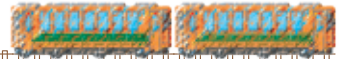


津軽鉄道に新たな名所！種村直樹『汽車旅文庫』開館！



11月13日、津軽鉄道津軽飯詰駅に「レイルウェイ・ライター種村直樹『汽車旅文庫』」が開館しました。鉄道作家の故・種村直樹氏が執筆し、これまで保管されていた約3,000冊の鉄道書籍や資料が並ぶほか、種村氏が実際に使用していた机を設置した書斎が設けられ、初日は県内外から関係者やファンが約70名訪れ、にぎわいました。



種村氏が実際に使用していた机を設置した書斎

2014年の種村氏の死後、読者の会のメンバーらが協力し、書斎に残った多くの蔵書を後世に残そうと全国数カ所の鉄道関連施設に寄贈。関係者を通して縁があった津軽鉄道には段ボール100箱分の書籍や机が届き、飯詰地区の住民グループ「飯詰を元気にする会」（岡

田千秋会長）が東北職業能力開発大学校青森・秋田校の協力を得て展示準備を進めてきました。

開館式が行われた日は津軽鉄道が全線開業した日でもあり、式典を主催した同社の澤田長二郎代表取締役社長が「津軽鉄道全線開業日に汽車旅文庫開館を迎えることができ、津軽鉄道の魅力が大きく増したと思う。これから津軽鉄道が多くの人との出会いの場になれば」とあいさつ。続いて佐々木市長が「津軽鉄道は昭和5年の開業以来、地域の人々の足など重要な役割を担ってきた。開館を機にファンの聖地となることを願っている」と話しました。



新幹線の形をした汽車旅文庫の看板が設置された

種村直樹（たねむらなおき）

1936年、滋賀県大津市出身。京都大学卒業後、毎日新聞記者として国鉄などを取材し、73年にフリーに転身。「レイルウェイ・ライター」を名乗り、汽車旅をテーマに執筆活動を行う。主な著書は「気まぐれ列車で出発進行」「きしゃ記者汽車」「遙かなる汽車旅」など多数。74年には読者の会「種村直樹レイルウェイ・ライター友の会」が結成された。2014年、78歳で死去。

冬の風物詩 ストープ列車が運行を開始



当市と中泊町を結ぶ津軽鉄道で12月1日から冬の風物詩「ストープ列車」の運行が始まりました。

同日、津軽五所川原駅ホームで出発セレモニーが行われ、澤田長二郎代表取締役社長が「新型コロナウイルスの感染状況が落ち着いてきているため、感染対策を行いながら出発セレモニーを行うことができた。ストープ列車のあたたかさや車窓から見える雪景色を楽しんでもらいたい」とあいさつ。津軽鉄道活性化協議会会長の佐々木市長は「出発セレモニーがファンや地元の皆さま

と開催することができ、たいへんうれしく思う。津鉄ア・モーレやファンの皆さんがこれからも津軽鉄道を盛り上げることに期待している」と話しました。

出発セレモニーでは三弦小川会による津軽三味線の演奏が行われたほか、新宮団地こども園の園児が子ども用の津軽鉄道の制服と制帽を着用して元よく手を振り、一番列車を見送りました。

ストープ列車は3月31日まで運行されます。



出発セレモニーでのテープカット



手を振って一番列車を見送る園児たち